

[研究ノート]

就職支援を通して見えてくる女子学生の姿

—就職相談の事例から—

一 条 孝 子

1. はじめに

2010年の3月に卒業した大学生たちは、「就職氷河期」という社会状況のなかで、困難な就職活動のなかに身を置き、悩み、苦しみながら巣立っていた。過去においても、1992年以降の就職状況は、バブルが崩壊し学生の就職活動に大きな影響を及ぼした「就職超氷河期」と言われた時代で、今日と同様の状況にあった。当時は「均等法第二世代」とも世の中でいわれた時代であり、特に女子学生にとっては門戸を閉ざされるなど苦難な時期であった。

筆者は、宮城学院女子大学の職員という立場で、1993年の「超氷河期」から、2008年以降の「第二氷河期」といわれる2009年度まで、10年以上にわたり、学生の就職支援を担当し、さまざまな学生の姿をみてきた。この間の大学の就職支援部門は、まさに激動・激変のなかにあった。大学の全入時代と言われ、多様な学生が入学する一方で、学生への就職支援の社会的ニーズが大学に対して強く求められている今日、大学の就職支援は、①企業と学生をつなぐ支援（求人確保のための企業訪問、企業からの求人票の管理、学生の求職の支援など）、②就職ガイダンス（就職活動の全局面にわたる直

就職支援を通して見えてくる女子学生の姿

接的支援), ③相談業務, ④キャリア教育(正課の授業における職業観の養成他), ⑤キャリアサポートネットワーク事業(学科間, 学内外との連携) ⑥その他(情報の収集・提供, 既卒者支援など)と多岐にわたっている。そのなかで, 就職をめぐる学生が悩み苦しむ姿に直接ふれる機会が多いのは就職相談の場である。

就職をめぐる学生たちの悩みの内容は, 時代とともに変わっていくものもあれば, 時代を超えて共通するものもある。また, 女子学生であるがゆえの悩みもある。そのなかで今日増大している特徴的な悩みは大きくいて三つある。第一は就職試験で求められるコミュニケーション能力をはじめとする「社会人基礎能力」をめぐる悩み, 第二は自己分析や「自己価値感」をめぐる悩み, そして第三は親との関係をめぐる悩みである。

大学の「出口」でみられるこれらの学生の悩みの根源は, 経済・社会・家族をめぐる社会状況にあり, 大学の就職支援を超えた問題である。とはいえ, 大学の就職支援では, 大学を超えた問題だといって手をこまねていることは許されない。就職支援という枠内で学生に寄り添い, 個別の問題の一つひとつに丁寧に対応することが求められる。筆者は大学における就職支援全般に関わってきたが, 就職相談の場では, 多様なカウンセリング手法を用いて悩みを抱えた学生に対応してきた。本稿では, 大学の就職相談を通して大学の「出口」で抱える女子学生の悩みを類型化し, そこで活用したカウンセリング手法とその有効性を検証する。

また近年, 大学の就職相談には, 学生からだけでなく, 保護者からの相談も多くなっている。保護者からの相談は, 直接面談に来る場合と, 電話での相談を受ける場合とがある。相談にきた保護者は, 学生の名前はもちろん, 自分の名前を名乗ることも嫌がるが, 単に話を聴いてほしいという保護者も多く, 親の子どもに対する期待, 考え方, 保護者自身の就職体験とは異なる今日の就職状況へのとまどいなどに関しては, 10年前と現在では若干の変

化がみられるものの、「過保護な親」「親から逃げる子ども」の構図は10年前とさほど変わらない。そしてこうした保護者への対応のなかで、大学の就職支援に関する課題が浮かびあがることもある。本稿では、保護者からの相談も考察の対象とし、そこから今後の大学の就職支援をめぐる諸課題を考察したい。

2. 大学生の就職をめぐる現状と学生の悩みの特徴

1990年以降、企業の新規学卒採用方法は大学偏差値中心の採用から即戦力を重視する採用へと変化した。そのために求められる能力として、採用の場では、学業よりも「社会人基礎能力」と呼ばれる、行動力やコミュニケーション能力、人間性が重視されるようになった。そしてこの「社会人基礎能力」を判断するために、企業側は、学業以外の学生生活での行動、経験、体験など多方面から学生を知ろうとするようになり、これらに応えるために、学生が自分自身を理解することが求められるようになった。これが「自己分析」と言われることである。1990年以降の採用の変化のなかで「自己分析」は就職活動の重要な要件となったが、学生にとって「自己分析」は容易なものではなく、「自己分析」ができずに悩む学生が例年多くみられる。

「自己分析」のなかで学生が突き当たるのが「自己価値感」である。今日、自分に自信を持ってない学生、自分に価値を見いだせない学生が増大している。東京家政学院大学教授根本橋夫氏の著書『なぜ自身が持てないのか』（PHP新書、2007）によると、「自己価値感」とは、自分に価値があるという感覚のことで、自分についての根底的な感覚のことである。この「自己価値感」をどのように獲得し、どのように保持し、どのように高めようとしているかが、その人の性格を形づくり、その人の人生全体をかたどっていく。これとは反対に、自分が「無価値」であるという感覚—「自己無価値感」を強く形成する人もいる。このような人は、一例として自分は周りから受け入

れられていない、自分に対して自信が持てない、自分が何をしたいのか本当は分からないなどの意識が心の奥底に潜んでいる。そして、このような基本的な自己価値の感覚は、幼児期から形成され、児童期の初期に確立されると根本橋夫氏は述べている。多くの学生たちの就職活動や相談内容などから見えてくるのは、本人は意識していないがこの「自己無価値感」を持つ学生が多いということである。

以下、就職相談の場での女子学生の悩みの典型を紹介し、それに対する対応及びそこで活用したカウンセリング手法とその有効性を検証したい。

3. 学生・保護者の悩みとそれへの対応…就職相談事例から

(1) 自分に自信が持てずに悩む学生

事例1. 「なにをしたらいいかかわからない」

4年生の11月に予約をして相談にきたA子。元気がなく、話す声も小さく、視線を合わせない。しばし沈黙が続いたあと、「なにをしたらいいかかわからない。だから、就職試験をまだ一度も受けていない。でも、卒業するまでには就職を決めないと親がうるさい。どうしたらいいだろうか?」

両手を握りしめて眼に涙を浮かべている。A子は周りの友達が結構内定をもらっていることに最近気がついたが、友達は内定をもらったことをA子に遠慮して内緒にしている。A子はそのような配慮にも疎外感を持ったようである。さらに、手や顔に湿疹が出始めている。

A子は、両親、2人兄弟の長女。大学へは特にやりたいことがあって入学したわけではなく、何となく入学した。4年間の大学生活は、特にサークル活動も、ボランティア活動もしたことがなく、アルバイトは短期に少しした程度で、本人に言わせるとアルバイトをしたという実感が無い。就職は「しないといけない」と思っている。「何故そう思うのか?」と聞くと、「卒業したら就職をしなければ、と親がうるさいから」と答える。

A子は、周りの友達がどんどん就職が決まっていき、自分だけが取り残されることへのあせり、親から就職のことを聞かれることへのプレッシャーと不安のなかにあり、そのために、アトピー性湿疹にも苦しめられているという状態であった。

〈対応〉

A子との会話や様子から、自分に対して自信を持っていないことが言葉の端端から垣間見られた。自分に対して自信を持っていない場合、最初は具体的に就職についての話をすることよりも、A子自身についてアプローチをしていくことが大事である。

まず、精神的にそのように「辛い」状況でありながら「就職相談に来てくれたこと」に対して¹コンプリメントをする。

次に、A子が「自己分析」をきちんとやれていないことから、一緒に「自己分析」をしていった。キャリアカウンセラーは「自己分析」のできない学生に対して、過去にあった大事な出来事、嬉しかったこと、悲しかったこと、いまは忘れていたが小さい時に好きだったもの、得意だったものなど、時間軸を追って探していく作業を手伝うのである。

ここでは、A子が自分で見つけ出せないでいる自分の良さ、漠然と大学に入学したと知っているが、もしかしたら、この大学を選んだことは自分では気づかない何かがあったのではないかと、さらに4年間の大学生活を、意味のない楽しいこととあまりないものと考えているが、なにか一つでも心に残っていること、忘れられない出来事はなかったのかななどを、ひとつひとつ話し合っていた。

やり取りのなかでA子は、中学、高校と書道を習っていたこと、大学のサークルには所属していないが、いまでも書くことは好きであることが分か

¹ コンプリメント（称賛）とは、本人のすでに持っている上手くいっている部分を認め、相談者がクライアントを理解し、関心をもっているというメッセージを伝えるのと同時に、クライアントが変化することを励ますことである。

る。確かに、A子の書類の字は上手である。そこでA子に、中学、高校の6年間を一つのことに打ち込んだことを言葉でいえば「頑張り屋」「継続性がある」ことであり、字の美しさはおおいに自慢していいことであると話す。また、A子の話し方がとても丁寧だということにも感心したのでそのことも伝える。A子は、今まで他の人から「字がきれい」とか、「話し方が丁寧」と言われたことがなかったと驚いていたが、嬉しそうだった。A子は、本人の持つ良さを伝えられることにより態度が変化し、相談員の目を見て話すようになった。そして「就職について再度よく考えます」と言って帰って行った。

これは相談のなかで毎年よくみられるケースである。就職相談のなかで多いのが「自分のよさがわからない」「自己PR」するところがなにもない、という相談である。このような学生には、「面談」しているときの表情、態度、持ってきた書類、質問のなかから、必ずその学生の「よさ」を探し出して伝えてやるのが大事である。この方法は²小野直広氏の「短期療法」のなかの「光あるところに光を」の手法である。「光あるところに光を」の手法とは、「問題の人（就職相談の場合は学生）」のもっている長所・美点を「顕微鏡」をつかってでも探し出し、確認し称賛することである。「自己無価値感」を持っている学生にとっては、自分ではまったく気がつかない「良さ」を伝えてもらうことは、就職活動の次のステップを踏み出して行くためにはとても大事なことになる。A子は、就職活動のための次のステップを踏み出していった。

事例2. 「自分がわからなくなってしまった（もう、自信がない）」

次のケースは、10年前の「超氷河期」時代に対応した学生である。

B子は話し方、物腰、考え方、どれをとっても大人の雰囲気を感じさせる

² (小野直広『こころの相談』日総研出版 1995年。同『107錠のこころの即効薬』日総研 1998年)

就職支援を通して見えてくる女子学生の姿

学生である。

教職にも興味を持っているが、一般企業を中心に自分のやりたい仕事、方向を明確にもっている。4年の4月頃から、自分の目指す会社の募集があるとどんどん応募していったが、結果がなかなかついてこなかった。そのような状況のなかで、6月に教育実習に行くことになっていた。本人とすれば教育実習に行く前までに内定の1つもとっておきたい、という気持ちが強かったのだろうが、「超氷河期」の時代には6月に内定を取るということはなかなか難しいことであった。このような時期にタイミングよく「教育実習」が始まることは本人にとってはむしろ良かったようで、「就職活動」を中断して「教育実習」のみに集中していった。7月に入り、「教育実習」が終了したとの報告に就職担当に来た時には前の明るさが戻っており、「教職」という選択肢も心の中で芽生えたようであった。

その後夏休みに入り、しばらく音沙汰がないなかで、本人から手紙が届いた。内容は「教育実習」から戻り再び就職活動を開始したが、まずは、受ける会社がどんどんなくなっていく怖さ、また、受けても「面接」でダメになる怖さが重なり、精神的に疲れてしまい体調を崩し入院をしたというものだった。

〈対応〉

B子は、早い段階から「就職活動」に入るための準備をしていた学生である。しかし、「超氷河期」時の就職活動は、表面上の男女差別はなかったが、女子学生には困難な時期であり、受ける会社がどんどんなくなるという不安を抱えることは、当然だと思われた。とくに、早くから活動していればその思いは強く、精神的に疲れていったのだと思う。B子が退院をして、やつれた様子で学校に顔を出した時、「しばらく、就職活動を休んではどうか」と提案してみた。

その後、B子は10月の大学祭後に元気な様子であらわれた。友人と京都

に旅行をしてきたこと、就職活動はしばらく中断して卒業論文に集中することなどを報告していった。「しばらく就職活動を休んではどうか」という提案は、1960年代に米国で始まった家族療法の一つで、現在世界の家族療法家に大きな影響を与えている「短期療法」のなかで使われている「小さな変化」という手法である。「短期療法」では問題が複雑になった場合、一度その場から離れる方法（エスケープ理論）を効果的に用いているが、この「小さな変化」はそれに近い。このようなケースは毎年2～3例はある。この「小さな変化」は本人が取り入れやすいもので、やりやすいものが効果がある。B子はそれを「旅行」という形で取り入れた。

B子はその後、男女の差別がなく働ける職場として教職を選択した。その動機の一つとして、就職活動でことごとく自分に対して自信をなくした時期（6月）に、「教育実習」で生徒たちと接したときに、ここでは自分が必要とされていると感じられたことや、男女の差がなく働けるということに、強く心が動かされたことがあった。B子は卒業後1年間勉強をして次の年に教員採用試験に合格し、中学校の教師になった。

(2) 保護者との関わりの中で悩む学生

事例3. 「母親が気になってしょうがない」

次に保護者との関わりの中で悩むケースを紹介する。

10年前の「超氷河期」時代の学生C子。相談予約で現れたC子は、ほとんど無表情でこちらの顔を見ない。C子の所属する学科は専門を活かして就職するか、自分で教室を開くのがほとんどで、10年前あたりは、一般企業に就職する人は少なかった。そのため、就職相談に来る学生も少なく、C子が予約を入れて相談にきたのは珍しいことだった。緊張している様子なので何気ない会話から入っていった。

C子は、自分の学科から一般企業に就職することは、大変なことなのかな

どを質問したが、声は小さくよく聞き取れず、全体的に暗く、話しながら時々小さくため息を吐いたり、視線を宙に泳がせ、心ここにあらずという感じだった。しばし、やり取りをするうちにC子は他になにか悩みを持っているように見えた。初めて笑った顔が非常に印象的だったのでそのことを伝えようと、次も相談に来たいと帰って行った。

2回目は1週間後に来た。前回よりも表情が明るい。いろいろ話していくうちに、自分の両親について話を始めた。C子の家族は両親、兄、C子の4人。父はおとなしい人だが、母親は感情の変化が激しいために、父も兄も母親の顔色をみて生活しているようだ。母親は比較的C子には気を遣っているが、C子は小さい時からそのような生活することに疲れている。またC子は、そのような母を嫌いになる自分もどこかで許せないと思っている。このような環境から抜け出すには就職という方法で家を出ることが一番いいと考えており、そのために関東圏あたりに行きたいと考えている。しかし、専門を活かした就職は難しく、独立した生活を送ることなど難しいと考えている。また、ここ最近、あまり母と言葉を交わしていないと寂しそうに話す。

〈対 応〉

C子の気持ちの奥には、母親と仲良くしたい、母親を受け入れたいという気持ちが強くあることが会話の端々に感じられたため、「来週の相談に来るまでの一週間、朝、起きたら必ずお母さんに「おはよう」と声をかけること。ただそれだけでいいからできますか?」と提案すると、やってみるといふ。次の面接で、C子は「一週間『おはよう』を言いました」と報告をした。今まであまり口をきかないC子が「おはよう」と声をかけたので、母親は驚いた様子だったそうである。母親が返事をするかどうかは関係なく毎朝声をかけると決めていたので、母親の様子は気にならなかったとのこと。「それでは、次の一週間は『おはよう』の後にその日の天気のことを付け足して話してみましょか?」と提案すると、C子は楽しそうに「やってみます」と

帰って行った。次の予約でC子が来た時の表情は、これがあの暗くて溜息混じりのC子だろうか、と思うほど明るくなっていた。当然ではあるが今は母親との会話は「おはよう」と天気の話だけではないとのこと。

一週間だけ母親に「おはよう」をいうという提案は、事例2の「小さな変化」の手法である。C子にとって「おはよう」の言葉は、自分がやりやすい、そして、小さなものであったために実行できたこと、さらに、たった一言であっても毎朝声をかけることにより、母親に変化が現れたこと、それは次の週の「毎朝、その日の天気も一緒に付け加える」という提案を楽しそうに、積極的に受け入れたことから感じられる。このように、何かが一つ変化していけば波紋のように広がっていくのである。

その後、C子は東京に就職が決まった。正社員ではないが自分の学んできたことを活かせる職場とのことであった。卒業してから五月の連休あけに、C子から手紙がきた。東京で元気に仕事をしていること、学生時代から交際していた人が東京で就職をしたために、お互いに仕事が慣れてきたところで、結婚をする予定であるとのこと、そして最後に母親とのことを次のように書いていた。

今でも理解し合えたとは思っていないが、母を憎む気持ちを今は持っていない、なによりも、自分が東京で就職をしたいと母親に率直に話せたこと、了解をもらえたこと、親に反発して飛び出したのではないということは、これから先の自分の人生において、良かったと思っている。

また、次のようにも書かれていた。

就職相談に行く人は、就職のことだけで悩んでいく人だけではないと思う、大事なのはその時にそれをうまくキャッチしてもらえるかどうかだと思う。

C子の場合「就職相談」という場ではあったが、就職の相談以前に本人自

身が意識していたかどうかは分からないが、母親と家族、そして自分と母親との関係について以前より悩み続け、それが就職という現実を考えなければいけない時に、表面に浮かび上がったのではないかと思う。母親との関係が劇的に変化したとは思えないが就職という現実的なことを通して、C子は母と自分の関係に目を背けずに向き合うことにより、一つ大人への階段を上ったのかもしれない。

このように、就職を前にした時に、親との問題で就職活動が上手くいかないケースは、相談を受けている中で毎年数例はある。幼児期からの保護者との関係が、就職を考える時に避けては通れないものとして出てくる。そしてこのような関係が多くの場合、自分に対して自信が持たなくなり「自己無価値感」を持ってしまうのではないかと思われる。

事例 4. 「大学まで入ったのに」……保護者への対応

「超氷河期」の時の学生 D 子。「英語力を活かした仕事をしたい」「人と関わる仕事をしたい」、との希望を持って相談に来る。自分のしたい仕事がかかを把握しており、そのために今何をすればいいかを理解し、自分の将来像を明確に語れる聡明な学生。就職活動開始時に自分の将来像を具体的に語る学生が数少ない中では、非常に印象的な学生だった。D子は地元の企業を希望していたこと、英語が使える常にと会う仕事、このような条件を満たす場として「ホテル」を希望していた。D子は自分から積極的に志望先に電話をかけたり訪問をするなどを繰り返し、とうとう地元でも老舗で有名なホテルの試験を受けるチャンスを得、さらに、内定を得るまでに至った。

それからしばらくして D 子が相談にやってきた。親にホテルに内定をもらったと話をしたところ反対された、特に父親が「ホテルに就職させるために大学に入れたのではない」と猛反対。この父親は国立大学を卒業したあと一流企業に就職している。D子は父親の予想以上の反対に困りはてて相談

に来たのである。

〈対応〉

D子には「父親に対して粘り強く説得をし、ホテルの仕事を丁寧に説明すること」などのアドバイスをして励ます。数日後D子の父親から電話があった。非常に丁寧な内容で「娘が就職先としてホテルを選んだ事に非常に驚いている。親としては英語力もあるのに、メイドの仕事をするために大学に入れたのではない」と話す。

父親自身も混乱し迷っていることがよく伝わったために、一般的なホテルの仕事内容、ホテルウーマンとして求められる能力、何故その能力が必要か、日本で一流と言われているホテルはほとんど大学卒業の人を採用していること、また、世界で一流と言われているホテルに勤めている人の能力は非常に高いことなどを話し、これからは優秀なホテルウーマンがますます求められ、今後一流のホテルは非常に狭き門になるに違いないなどの話をする。

それからしばらく経った頃、内定報告を出しにD子がやってきた。父親がD子に「一流のホテルマンになるために、勉強をなさい」と許してくれたとのこと。卒業後D子から手紙が届き、実は父親がホテルの仕事を理解するために、出張の時にホテルに泊まりホテルマンの仕事を見てきたことや、自分が抱いていたホテルの仕事とは違っているかも知れないと思い、D子の希望を大事にしようと父親が賛成してくれたことが書かれていた。その後地元の新聞に期待された新人の1年後という記事に、D子が大きく掲載されており、すでにフロントの仕事に就いたことがわかった。

このケースのように、今から10年以上前には保護者が持つ「会社」のイメージは現在とは大きく違っていた。特に「ホテル」「デパート」関係、また、最近希望者の多い「アパレル」「生命保険関係」などは、10年前の親にとっては「大学を卒業して就職する会社として考えられない」といわれた代表的な業界である。保護者がその仕事内容に対して心配をする場合、何故大

学卒業者を会社が必要としているのかなどをきちんと伝えることが保護者の不安を軽くすることに役に立つのである。

事例 5. 「親の期待に添わないと申し訳ない」

3年生の11月あたりから、熱心に就職活動をしていたE子。E子様子を何か変だと感じ始めたのは、会社を受ける場合など受験先から学校に電話をかけてよこし、一つ一つ確認をしたり、就職相談の予約をほとんど毎日入られるなど、悲壮感のようなものを漂わせていたからだ。そのような状況で受けた会社の結果は軒並みおもしろくなかった。健康面、精神面で、不安定な状況が見え始めた頃、学校推薦があり多数の希望者の中にE子の名前もあった。E子の状況を心配していた時でもあったので、E子を呼んで志望理由を聞くと、親がこの会社はいいからぜひ応募するようにといているので、なにがなんでも学校推薦を受け、試験を受けなければだめなのだと、泣き出した。

E子は学校推薦の選考基準を満たしていたために2名の推薦枠に入った。学校推薦を受けたE子は筆記試験を通過した。しかし、今までもE子はほとんど「面接」が通らないというパターンを繰り返していたが、この会社も結果は不採用であった。企業の人事担当者へE子について尋ねたところ「筆記はよかったが、面接のときに物足りなさを感じたこと、特に気になったのが表面的にしかな会社のことを理解していないようで、話していることが観念的で、もっと自分の言葉で話してほしかった」とのことだった。

結果は、学校から本人へ連絡することになっていたが、単純に電話で結果を伝えることは不安があったため直接会って話をすることにした。また、今までのE子様子を考慮して、他の学生がいない応接室に案内をした。E子に不採用だったことを伝えると、30分くらい大きな声で泣いており、その後、ぽりぽりと語り始めた。

E子は市内でも有名な進学校の出身。友達はみな国立や有名私立大学へ進学しており本当は他の大学へ行きたかったが、合格できず、やむなく今の大学に入ったとのこと。

兄弟はみな国立や有名大学に入っている。そのような中で、自分は大学進学で親の期待を裏切っており、せめて、就職だけは親の希望するところに入りたかったが、親の期待に添うことができなかったことを嗚咽しながら話した。

〈対 応〉

「今まで、ずいぶん頑張ったのだから、悔しい気持ちはよくわかる。この際思いきり泣いてかまわない」というメッセージをE子にだした。E子は30分くらい号泣したあとで、「家に帰ったらこんなに泣かない」といい「こんなに泣いたの初めて」と話す。落ち着いたところにいろいろ話をする。

まず、「今回の結果を親に話せるか」と聞くと「今日帰ったら話します」という。「あなたのやりたいことが何かをもう一度ゆっくり考える時間が必要だと思うし、あなたがやれるのであれば少し就職活動を休みましょうか？今まで凄く頑張ったのだからここで小休止をすることは悪くはないと思う」—「疲れたのでそうします」

「今、一番やりたいことは？」—「友達と会って映画や音楽を聞きに行きたい」。

このような場合、学生へは就職活動を頑張れというメッセージではなく、「就職活動を休止しなさい」というメッセージを出す。この方法は短期療法でよく用いられているパラドキシカル・アプローチである。パラドキシカル・アプローチとは、問題をくり返して（この場合不合格を繰り返して）いる場合、その悪循環を断つ手法の一つである。うまくいかない時は、「何か今までとは違うことを行う」という短期療法の技法があり、その手段の一つとしてこの手法が用いられる。

泣きやむまで1時間以上がかかったが、E子はその後帰宅した。その後、E子から連絡があり、学校で泣いて帰った日は、1時間以上も自転車で目的もなく遠くまで行ったこと、その後に親に話しをしたこと、就活を中断して東京の友達のところ遊びにいったことなどを報告してくれた。その後しばらく姿が見えなかったが体調を崩して学校を休んでいたことがわかった。その後、幸いにも体調も回復し、就職活動を再開した。10月の大学祭では元気な姿を見ることができた。

E子は、大学入試で親の期待を裏切ったという気持ち、さらに自分の希望しない大学に入学した、という思いを4年間持ち続けながら大学生活を続けていた。しかし、大学生活では積極的に学会などの委員をするなど、それなりに楽しかったと語っている。そのようなE子が今度こそ親の期待に応えなければと就職活動をしたことは、容易に想像できる。しかし、大学入試と違い、上位の成績をとれば合格できるということは就職試験では通用しない。面接という場において、さまざまな角度から本人が見られるような状況では、親がいくらい会社だと言ったからと、受けても通用しないのである。また、E子は兄弟とも比較されており、一流企業を選んで受けていたことなどからも親兄弟の両方にコンプレックスを抱えていたことも想像できる。

このように、4年生の出口である「就職」という現実と直面した時に、今まで抑えていた「保護者との関わり」の問題が噴き出てきて、就職の難題とともにそれらの問題にも直面するのである。

(3) 保護者からの相談

ここ数年、保護者からの相談をうけることが増えている。電話での相談が多い。その場合、学生の名前や自分の名前を言わずに保護者が一般的な例として聞いてきたり、自分の子どもが、どのような状況になっているのかまったく把握できずに、焦って学校に問い合わせをしてきたり、内定がもらえな

就職支援を通して見えてくる女子学生の姿

いのは大学側の指導が足りないと、怒りの電話をよこしたりと、実にさまざまである。

また、数年前より大学が青森、秋田、山形、盛岡、福島での地方の保護者のための「大学後援会」を開催し、その中で保護者のための「就職相談」のコーナーを開設したところ、毎年多くの保護者が相談に訪れている。両親が揃って相談に来るといったケースも増えており、相談内容も「心配」も「悩み」も多様である。また、保護者が子どもとどのように向き合っていけばよいのかわからず困りはてている様子も見える。保護者にとって大きな関心事となっている「就職」について、どのように対応するかは、大学にとって大切な課題である。

事例6. 「4年生なのに就職活動をしているかどうか心配」

実直そうな父親がおずおずと話す。「自分の娘ながら、就職活動をしているのかどうかまったく分からない。夏休みにも帰省しないし、何を考えているのかまったくわからないので、就職担当の人に聞いてみようと思い参加した」

父親が心配しているF子が、就職相談を受けている場合はある程度把握しているが、F子は就職相談にも全くきていないため把握できていない学生だった。電話での連絡はあるのかどうか聞いてみると、たまたま母親が様子を尋ねるために電話をすることがあるらしいが、就職の話をするとう嫌がる、とのこと。

〈対応〉

F子の場合、親が過干渉ではなく子どもに対して遠慮をしており、どのように対応したらいいのかを戸惑っている。このような保護者は、就職の場合だけではなく娘の大学生生活もよくわかっていない。いや、わからせてもらえない、という方が当てはまるかもしれない。この場合まず親子での会話が

不足していることが感じとれるので、今度電話をする時、F子のもっとも嫌がるであろう「就職」のことを話題にはせず、F子と自然に会話ができるものを探して話してみたらと、提案する。例えば、「食事」のこと、「健康状態」のことなどをさりげなく簡単に話し、会話の最後に、困ったことがあったらいつでも連絡をよこすようにとのメッセージをつけておくこと。

これだけをやるだけでも、F子が親からの電話を嫌がることがなくなり、いつでも親が後ろから見守っているという安心感を持つことになる。親からすれば、一番心配な就職のことをどうしても話題にしたいのは十分に理解できるが、このような場合は、まず親子で会話ができるような状況にすることが大事である。

事例7. 「うちの子の就職が決まらないのは学校が悪い」

ある日、名前を名乗らない母親から電話がかかってきた。娘のG子は就職活動を早い時期から一生懸命にやっているのに、なかなか内定をもらえない。本人は就職相談に何度か行っているようだが、学校はどのような支援をしているのか、と一方的に攻撃的な口調で話す。学生の名前を言わないため状況がわからないこともあったが、いろいろと話を聞いているうちに、就職というよりもG子に対して普段から不満があったこと、そして、自分がこんなに心配しているのに父親である夫は話を聞いてくれないなどを電話の向こうで延々と話し始めた。

〈対応〉

G子の母親だけではなく、電話などで苦情を言ってくる保護者（とくに母親が多い）は、苦情という形をとっていながら自分自身の不安を聴いてもらいたいというケースが多い。このような保護者の場合、本人の気のすむまで話を聴きその悩みに対して共感するとたいいてい場合は最後に「忙しいところすみませんでした」と自分から電話を終わることが多い。就職は学生だ

けではなく、保護者にとっても今まで底辺に隠れていた不満、親子関係、夫婦間の悩みなどが表面にあらわれてくることがあるのである。このような保護者の心理や対応を就職担当者は心得ておくことが今後ますます必要になってくるだろう。

(4) 精神的な痛みを抱えて悩む学生

学生が就職担当者に相談に来る時は、就職活動で息詰まってしまう、悩んでくることが多いが、実はその相談の裏側に本人が抱えている深い悩みを垣間見ることがある。時には本人自身が意識をしない場合もある。

事例 8. 「面接を受けるのが苦痛でたまらない」

面接試験があるので練習をしたい、と H 子が相談に来た。前にも何度か面接練習をしているが、なかなか良い結果を得ることができない。練習では結構上手なので不思議に思い聞いたところ、「面接が怖い」といって涙を浮かべる。何度も面接でダメになって自信を無くしている学生が多いが、H 子の様子がそれとは異なっているように見える。「どこが一番怖いのか」と尋ねると「面接官はたいてい男の人だが、面接官の顔を見ることができない」と泣きじゃくる。

H 子との会話から小さい時から父親に反抗をすると暴力をふるわれ、そのような父親に対して嫌悪感をもっていることが感じられた。H 子は就職を機会に家を出ようと考えているため、どうしても就職先を決めたいと早くから活動をしているのに「面接」でいつも失敗を繰り返していたのだ。H 子との会話からなぜ「面接官の顔を見ることができないのか、また、面接が怖い」のかが理解できた。

〈対 応〉

採用試験の面接官は最近女性も増えてきているが、圧倒的に男性が多い。また、面接官は父親の年齢に近い人が多い事などから、H子は色々と質問をする面接官にたいして無意識に父親の姿を重ねてしまっていたのだろう。H子との会話から、日常生活においては特に男性に対してすべて嫌悪感を持っている訳ではなく、父親と年齢が近い人、また、面接という緊張した場面でのやり取りに、父親を重ねてしまうということが分かったため、あえて、男子の就職担当者とは何度も練習をすることにし、慣れてきたころに比較的父親の年齢に近い職員が面接の練習をした。

面接が苦手な学生や、面接官の顔を見ることがなかなかできない学生は、相談件数のなかでも多い方であるが、性格的に内向的であるとか、人の前で話すことに慣れていない学生が多い。H子の場合就職相談の会話のなかで「面接が怖い」理由がわかったが、就職活動がなかなかうまくいかない学生の中には、精神的なものが影響している学生が毎年何人かはいるのではないかと思われる。

事例 9. 「私は病院に行っています」

I子は高校の時から心療内科に通っており、大学では保健センターや学生相談室も把握している学生である。I子は3年生の1月あたりから就職担当者のところにも何度も顔を出しており、薬を飲んでいることなど自分の状態を話すなど担当者には心を開いていた。4月に入り就職活動が本格的になりだしたころから、I子も積極的に活動をしていたが、不安になるとその都度、朝、昼、晩と何度も顔を出すようになり、ほんの少しの不安でも確認せずには行動できないようになった。自分は病院に通い、薬も飲んでいるが就職したいのだ、という気持ちを担当者に語ることもあった。時にはテンションが高い日もあれば、非常に落ち込んでいる日もあるなど、就職活動を継続

就職支援を通して見えてくる女子学生の姿

できるだろうか、と心配をすることが何度かあったが、ほとんど毎日就職担当者に顔をだすか、電話をかけてよこすということを続けていた。

〈対応〉

I子については、学生相談室、クラス担任、保健センターが知っていたこともあり、学生部の先生と学生相談室、就職担当者が開催する「ケースカンファレンス」でも取り上げられ、学生相談室からのアドバイスが非常に参考になった。まず、就職担当者が同じ人で関わっていると毎日の朝、昼、晩の対応、電話での対応も大変なので、全員が対応できるようにしておくこと、また、相談する時のルールもきちんと話しておくこと。このようなことをI子に話すと、素直に理解してくれるのだが、だんだんそれが守られなくなってきた。また、担当者もそれだけで断ることもできないということもあり、できるだけ全員で対応することでI子の様子を見守った。

このような状況のなかでI子のすごかったところは、決してあきらめず、ついに3月の卒業式ぎりぎりの時に、内定を得たことである。I子のような既往症がある場合、すべてがI子のようにいくとは思えないが、I子の熱意や、就職担当者全員がI子を理解し対応の仕方を学生相談室との連携により学んでいたことなどがI子の支援に非常に役立ったのだと思う。とくに、時間外であれI子の話をいつも聞いていた担当者、また、就職担当者全員がI子の状態を理解し声掛けをしていたことなど、I子のケースから就職相談の在り方を学ぶことが多かった。

(5) 女子学生固有の悩み

社会環境が男女平等になったとはいえ、就職試験において男子と女子が本当に平等な形で選考をされているか、ということに関しては残念だが「差」があると言わざるを得ない。少なくとも男子の場合、選考において「容姿」はあまり問題にはされないが、女子の場合、そのことを意識せざるを得ない

ことになる。

事例10. 「自分は他の人と違っている」

G子は3年生の就職ガイダンスの1回目から出席するなど早い時期から就職活動に取り組んでいた。色々な会社を受けるのだがなかなか結果がでない。元気がなくなり疲れた様子が表面に滲み出ている。ある日、G子は、内定をもらえないのは、自分が他の人と違っているからだと思いつめた表情で語り始めた。

G子の雰囲気、容姿は、同級生と比較すると非常に大人びており、初めて見た時は何年か社会経験を積んでから大学に入ったのかと思うほどの落ち着きがあった。他の学生と一緒にいたら同級生には見られない。就職担当者でさえも最初は一度社会人としての経験があるのではないかと、思ったほどであり、髪型、話し方、動作などは30歳くらいの人のようにも見えたりする時がある。G子は小学時代から他の人と違っているのではないかと、思ったようで、それが理由で少し虐めにもあったようだ。中学、高校と幸いにも友達にも恵まれ、大学に入学しそれなりに楽しい大学生活を送れたこと、また、G子の母親もG子の悩みは知っていることなどを語った。

〈対 応〉

一般の学生たちと同じように、普通の面接をしていた場合、G子は第一印象で判断され不利になっていることは充分に考えられる。プライドが高いG子はそれを認めたくない、というジレンマが会話のはしはしから感じ取れた。そこで、G子が年よりも上に見られることは変えられない事実であること、むしろ、その部分をG子の持っている長所としていくこと、虐めにあいなながらもそれを克服した精神力の強さ、G子の悩みを受け止めてくれる家族のいるありがたさを話し、髪型が年齢よりも上に見せているように思ったので、さりげなくこの際思い切ってイメージチェンジを試してみたらどうかと

提案した。

5月の連休あけにG子が現れた時、髪型が変わっており一瞬違う人なのではないかと見間違う程だった。今までの老けた印象ではなく、若々しさの中にG子本来の落ち着きもあるという印象になっており、就職担当者がみな口ぐちに若くなり印象が変わったとG子に話しかけた。髪型の変化を第一歩としてG子は自信を持ち始めてきた。G子は、初めて髪型を変えたことや、今まで自分が同級生と比較して違うというのは感じていたが、それをどのように受けとめればいいのか、いや、受けとめたくなかったこと、しかし、就職活動は否が応でもそのことを突き詰められる、ということ語った。その後のG子の就職活動はけっして順調とは言えなかったが、8月以降に一つ内定を取り、さらに、年明けてから他の会社からの内定を得て、その会社に決めたと報告にきた。

就職相談をしていて一番心が痛いのが外見の部分で自分にコンプレックスを抱いた学生が、精神的に傷ついてしまうことである。根本橋夫氏の著書『なぜ自身が持てないのか』のなかに、男女の自己価値感を比較した場合、小学生まではあまり差がないが、中学くらいから女性の自己価値感が目に見えて低下する傾向があり、理由として女性の自信のなさや複雑な屈折した心理を、フロイトの「男根羨望説」からと言っている。また、エリクソンは男女の身体の違いが男女の行動様式や意識の違いを生む源だとも言っている。しかし、自己価値感には、そうした器官の違いによるよりも、社会的な要因が大きく関係していると考えられる。それは女性に求められる社会的規範であり、家庭での父親と母親の関係であり、そして女性に毎月現れる生理である。毎月の気分の落ち込みや身体の変調が、女性の自己価値感に否定的な影響を与えている可能性があると言っている。G子の例などは、女子が男子と比較して、就職の場においての自己価値感を持ってない一つ例のように思う。

以上、さまざまな悩みをかかえて悩む学生の事例を紹介したが、最後に一

人の働く女性として、自分のもっとも身近にいる母親をロールモデルにしている学生の事例を紹介する。

事例11. 「母親の働く姿がかっこよかったから」

保育士の採用試験を受けるにあたり、面接の練習のためにやってきたH子。母親が保育士で、小さい時から働く母親の姿を見て育ってきた。小さい時に母親の職場を見学して、生き生きと働いている母親の姿が心に残っている。また、家庭でも嬉しそうに園児の話をする母や、卒園してからも連絡をくれる卒園生を見て保育士の仕事をしたいと思ったようだ。また、両親が子育て、家事、仕事をしている姿を小さい時から見ているために、働く母親にとって、保育園は非常に大事な所であり、自分も働く母親の助けになる仕事をしたいと考え保育士の道を志している。そのため、なぜ自分が「保育士」の仕事をしたのかをしっかりと持っているH子は第一志望で「内定」をもらっている。

H子の母親は、H子が生まれてすぐに職場復帰をしており、H子は0歳から保育園に預けられ小学入学まで通園していた。その後、小学校では「児童館」に通っている。弟がいて、小さいときからH子は面倒を見ていたが、嫌ではなかったと言っている。小さい時から母親が働いていても、まったく寂しくないと言うのは嘘になるが、弟と二人でなんとなく遊んでおり、弟にはお母さんの役割をやっているという気持ち、家事や料理が得意になったのもよかった。しかし、なんといっても「働いている母の姿は、すごくかっこよく、私もあのようにになりたいと思った」と語っている。

このようにH子の他にも、働いている母親の姿に男女の性差のない働き方や、結婚をし子育てしながらでも仕事はやれるのだということを学び、そして、なによりも学生たちが母親の姿を、1人の人生の先輩として、働く女性の「ロールモデル」として捉えるなど、同性として働く母親から影響を受

けている女子学生は多数いる。

H子には、保育士を志望した動機の中にすでに保育士の仕事の持つ意味や、大切さをしっかり認識できていたことや、小さい時からの自分の置かれた環境をすべてプラスに捉えて、自分を大きく成長させているため、そのことを本人に伝えてやった。H子の物事の捉え方や、考え方などに対して感心したこと、将来よき保育者となるであろうことを感想として伝えた。

数ある面談において時として感心させられる学生に会うことがあるが、その時には就職担当者としてその事をきちんと学生に返すことが重要である。それは、学生と相談者の信頼関係にも繋がっていく。

4. ま と め

就職という「出口」において関わりを持った、さまざまな学生や保護者の姿を11の相談事例で紹介した。これら多種多様な事例を検討すると、就職支援に関して、今後取り組むべき主な課題が3つあることが分かる。まとめとして、その3つの課題を挙げるとともに、自己の対応経験を元にして、課題に取り組むためのいくつかの提言を行いたい。

まず第一に、相談事例でもっとも多い、自分に対して自信が持てない学生への支援の課題である。これは就職支援の枠を超えた学生支援全体の課題であるが、就職支援においても重要課題である。なぜなら、授業の受け方、受講する際の態度、教員や受講生仲間へのマナーなどは、集団のなかでの自分に自信をもち、「自己価値感」につながると同時に「社会人基礎力」の養成につながるからである。しかも、就職支援の場には目的意識を持った学生しか訪れないが、正課の授業では全学生に指導しうるからである。

この課題に取り組むために必要な対応として、次の2点を提案したい。

一つは、大学生活の早い時期に自信を持つことができるように支援することである。そのためには、充実した4年間の学生生活を送ることができる

よう、低学年から支援することが求められる。

もうひとつの提案は、上記を行いつつも、なお学生の多様な相談内容の心理面にも対応できるキャリア支援体制の構築である。筆者は、短期療法的手法により支援を行い効果があることを確認した。その意味で、就職相談にあたる職員のスキルアップ、定期的な研修機会を提供することが重要である。³小杉礼子氏編の『大学生の就職とキャリア』のなかには、膨大なデータ分析の結果、大学の就職支援で最も効果を挙げているのはインターンシップ支援と就職相談であると指摘されている。実際筆者の体験からも就職相談に対する学生のニーズは高く、相談業務はいつも多忙を極めている。一方、相談に来る学生からは、いつも混雑していて必要な時に相談の予約が取れないという声が多数聞かれる。相談員の力量の向上と並んで、担当者の増員が求められる。

就職支援の第二の課題は、子女の就職問題に直面する保護者への支援である。前述した事例からわかるように、保護者自身がよい意味でも悪い意味でも職業人の「ロールモデル」であること、学生は保護者との日常会話のなかから、いわば「隠れたカリキュラム」として職業研究、企業研究などのキャリア教育を受けている（「あの企業は悪い」「あの業界は将来性がある」など）ことなどから、保護者の子どもへの就職に及ぼす影響ははかりしれないものがある。筆者の体験からも、保護者の姿勢は学生の就職へのモチベーション、就職行動に多大な影響を与えている。しかし、保護者自身の体験と今日状況とのギャップ、親子関係の悩みから、保護者自身、子どもにどのように接したらよいのか、大きな悩みを抱え、大学に支援を求めてきている。このような現状をみるならば、大学が保護者への多様な働きかけをすることが重要であろう。

以上で述べた諸提案を要するに、今日の就職支援の中心的課題は学生一人

³ (小杉礼子『大学生の就職とキャリア』勁草書房、2007年)

就職支援を通して見えてくる女子学生の姿

ひとりへの心理的葛藤への支援ということである。かつては、求人票の掲示や、就職情報やそれらを扱う機器の設置、活用体制の構築等ハード面での支援が就職支援の中心であった。

表面的な面接対策としての「自己分析」は、労が多い割には学生の「自信」に繋がりにくい。学生が自分の本来の「長所」に気づき自信を得るための支援が求められる。これに対応するためには、支援者はその技量を身につけることが求められる。筆者は、この課題に関して筆者の試みの一部を事例を通して紹介した。しかし、これは「一つ」の試みに過ぎない。必要なことは、いかにして学生本来のニーズに応じていくかである。そのために、就職支援に関わる者はなによりもこの面での技量を磨くことを求められるし、また、大学はそのための体制と人的充実を求められている。

<参考文献>

- 小杉 礼子 2007 『大学生の就職とキャリア』勁草書房
- 小杉 礼子 2008 「需給両面の変化に対する大学のキャリア形成支援の課題」
キャリア教育研究 第25巻 第1号
- 下村 英雄 2008 「最近のキャリア発達理論の動向からみた〈決める〉について」
(編『キャリア教育研究』第26巻第1号, 2008。所収)
- 根本 橋夫 2007 『なぜ自身が持てないのか』PHP 研究所
- インスー・キム・バーグ・ピーター・ザボ 2007 『ブリーフコーチング入門』創
元社 長谷川 啓三監訳
- 小野 直広 1995 『こころの相談』日総研
- 小野 直広 1998 『107錠のこころの即効薬』日総研